

特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン

夏期特別募金およびHIV／エイズ対策募金による活動報告

募金額：38,751,441円

募金件数：6,447件

募金期間：2007年10月1日～2008年9月30日（2008年度）

支援事業：マラウイにおけるHIV／エイズ検査相談所（HCTセンター）整備計画事業

インドネシア東ジャカルタ市における若者を対象としたHIV／エイズ啓発事業

ウガンダ北部キトゥグム県におけるHIV／エイズ対策事業

インドHIV／エイズ対策事業

ワールド・ビジョン・ジャパンでは、2008年度、ホームページやダイレクト・メールなどを通して、夏期特別募金およびHIV／エイズ対策募金をお願いし、多くの人々にご協力をいただきました。ご支援により、おもにHIV／エイズ対策事業に役立させていただき、多くの活動が可能となりましたことを、感謝しつつ報告いたします。

マラウイにおけるHIV／エイズ検査相談所（HCTセンター）整備計画事業

事業活動期間：2007年4月18日に開始し、現在も継続中

支援活動期間 2007年12月1日～2009年9月30日



【現地の状況】

アフリカ南部の小さな国、マラウイで1985年に初めてHIV／エイズが発見された以来、HIV／エイズは瞬く間にマラウイ全土に広がりました。人口1,360万人の国で140万から70万人の人々がHIV／エイズに感染していると、推測されています。大半の人々がHIV／エイズの恐怖を知っていますが、農村部においては、今なお十分な抗体検査・カウンセリングを実施する施設が少なく、HIV／エイズに対して適切な対策がされずに見過ごされています。

【事業内容】

マラウイにおいて、HIV／エイズへの取り組みは急務であり、さらに、地域を巻き込んだ統合的な支援が必要とされています。つまり、検査やカウンセリングとともに、HIV陽性と診断された人々へのフォロー、地域の人々への正しい知識の普及などが欠かせません。

ワールド・ビジョン・ジャパンは、マラウイの農村部での深刻なHIV感染状況の改善のため、日本政府の資金協力と皆さまからの募金により、エイズ検査相談所（HCTセンター※）の設立と運営のためのカウンセラー育成、および、HIV／エイズや抗体検査に関する啓発活動を行ってきました。

近年の原油高・食糧危機の影響を受け、現場では、インフレが急速な勢いで進んでおり、当初計画から事業縮小を余儀なくされましたが、マラウイ全土28県のうち9県13カ所にHCTセンタ

ーを建設し、運営に不可欠な設備・機材を整備することができました。建設地域は、観光拠点、国境付近の経済流通拠点など、潜在的感染者が多く見込まれている地域、または、急激な感染増加が懸念されている地域を中心に選ばれました。また、HCTセンターに勤務するカウンセラーは、マラウイ現地のNGOの協力を得てカウンセラー養成研修を受け、勤務を行っています。

マラウイにおいて、HIV／エイズについての正しい知識の普及は進んでいますが、人々のHIV感染者への偏見、差別は根強く残っています。そのため農村部において、HCTセンターというプライバシーが確保された施設が設立され、容易に抗体検査が受けられるようになったことは極めて画期的なことです。保健所の一室で検査が行われていた頃は、検査を受ける人数は多い月でも100人も満たない程でしたが、HCTセンターができ、カウンセラーが常時働くことができるようになったことで、420人もの



完成したセンザニHIVセンター（右はワールド・ビジョン・ジャパン中村スタッフ）



建設中のムンディンダHIVセンター

人が検査に来るようになった例もあります。

人々が積極的に、抗体検査を受けるなどHIV／エイズに立ち向かう行動に出るためには、家族や周囲の人々さらに地域全体へのHIV／エイズに関する啓発活動や、感染者への支援も必要不可欠です。

事業では、マラウイ国内でも地域によって異なる文化に対応するため、4種類のHIV／エイズ啓発テキスト(2万部)やポスター(2千部)を作成し、世界エイズデーやHTCセンター開所式などのイベントを通じて、抗体検査の重要性を伝えています。

また、感染者同士が、死および差別への恐怖や不安を分かち合う機会や、HIV／エイズへの正しい情報やサポートを提供するため、感染者が集うサポート・グループを組織しました。現在、サポート・グループのメンバーは、抗体検査の重要性を一般の人たちに訴える啓発活動の担い手となって活躍しています。



カロング県のHCTセンター開所式で伝統的な踊りを踊る現地の人々



カウンセラーとしての研修を終えた人々

今後～スタッフの感想

本事業は、まさに、ご支援くださった皆様、また、日本の政府、マラウイの保健省、NGO、地元住民いろんな方々が手を取り合って、実施されている事業です。

マラウイ全土9県で、現地の人々と協議しながら進められるため、実施期間中、計画が度々遅延することがありました。インフレなどのさまざまな問題もありますが、最もよく耳にした遅延理由が「葬儀」でした。関係者が葬儀出席をするために、ミーティングの延期や建設作業の中断が必要となりました。このように事業の進捗にも、HIV／エイズの影響が色濃くありました。

しかし地道な取り組みが実り、これまで急速な勢いで感染が広がっていたHIV／エイズですが、感染率上昇に歯止めがかかったとの情報もあります。ただし、アフリカの他の国では、感染率が一時低下したことにより安堵しているすきに、再度上昇したという国もあるので、今後も地道な対策が必要とされています。

支援を受けた人の声

事業を行っているンチシ県では、カウンセラーが県全体で20人しかいませんでしたが、支援で11人が養成を受け、新たにカウンセラーとして働き始めました。その一人がギフト・タンブリラさんです。彼は、現在ムンディンダHTCセンターで勤務しています。彼はこう語ります。

「HTCセンター設立以前、ムンディンダヘルスセンターでは、カウンセラーが一人しかいませんでしたので、彼が不在のときは、来訪した人々に検査などのサービスを提供できませんでした。その後、センターが設立され、以前は月に5～10人という訪問者数が、現在は月に100名以上の人々がテストを受けに来ます。私は、養成研修を受けたので、自信を持って、カウンセラーの業務を行うことができます。

また私は、サポート・グループのメンバーです。テストの結果、陽性と分かった人々に、私自身もウイルス保持者でありなが

ら前向きに生きることの大切さを伝えることで、彼らは希望を見出し、また、カウンセリングのメッセージを真剣に受け止めてくれます」

この事業は、より多くの人々がHIV／エイズと闘うための希望を与えています。



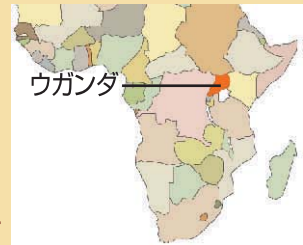
カウンセリングを行うタンブリラさん

ウガンダ北部キトゥグム県におけるHIV／エイズ対策事業（3年次）

事業活動期間：2006年10月～2008年9月（3年間）

支援対象地：キトゥグム県にある3郡：アミダ郡、ラヤモ郡、アクワン郡

支援対象者：3郡に住む孤児 5,000人



【支援前の状況】

ウガンダ北部、スーダン国境に位置するキトゥグム県は20年に渡る武力紛争の影響から治安が悪化し、社会的モラルの低下がHIV/エイズを蔓延させる温床となりました。両親を始めとする保護者をエイズで失う孤児も急増し、従来から伝統的に培われてきたアフリカの大家族制が崩壊、社会の機能は麻痺し、残された子どもたちは児童労働、児童兵士、性的搾取などを強いられる深刻な状況となっています。

本事業では日々の生活に必要な物資（衣服、栄養価の高い食事など）をエイズ罹患患者と家族に支援し、残された子どもたち、その家族に必要な心理社会的支援や物理的支援を行います。

【事業内容】

エイズにより両親をはじめとする保護者を失った孤児（おもに支援対象3郡の避難民キャンプで暮らすエイズ遺児たち）、HIV感染者を抱え困窮している家庭にある子どもたちのいる100家庭を対象に、栄養補助食をサポートしました。

医薬/治療薬が効果的に作用するには、バランスの取れた食糧・十分な水分摂取が必要となるため、栄養補助は大きな意義があります。具体的にはポシヨ（とうもろこしの粉を水で溶き固めた現地の主要食）、砂糖、石けんを各家庭に支給しました。この結果、雑菌に対する抵抗力が強まり、事業期間の1年間に症状悪化により医療機関での治療が必要となったのはわずか5人でした。

さらにHIVに感染した母親から生まれた5人の子どもに対し、母子感染を防ぐため人工乳哺育（栄養価にも配慮した人工乳により育てる）を支援し、5人全員が6か月で無事に離乳を終えました。誕生後の母子感染の多くは、母親からの授乳を通して行われるため、人工乳哺育の後に離乳を迎えたことは危険を回避できたことを意味します。この支援を受けた母親の1人は、次のように語ってくれました。

「私は、感染が判明したあと、家を追い出されてしまいました。絶望的になった私は、そのままではこの子を育てるのに母乳を与えるしかなく、HIVを感染させてしまっていたでしょう。ワールド・ビジョンが生後まもない時期から人工乳哺育を教えてくれたおかげで、この子は健康で順調に育つことができ、



人工乳哺育を受ける赤ちゃん

神様に感謝しています」

家庭の困窮事情により学校を退学した子どもたちを対象に職業訓練を行い、今後の生活設計に活かす技術習得の機会を提供しました。子どもたちは、コミュニティー・リーダーの推薦を受けて各地域から選出され、大工・建具技術、レンガ・コンクリート建築、オートバイ・自動車修理、洋裁などの研修コースを履修しました。本事業では28人が研修を受け、卒業後は習得した技術を活かし生計を立てています。

地域で社会的なモラル形成の中心的な役割を担う宗教団体指導者（キリスト教会、イスラム・モスクなど）が協力して、青少年を取り巻く諸問題に取り組む社会・心理的サポートのために、HIV感染に対する予防方法を含むワークショップを定期的で開催しました。親子間のコミュニケーションが円滑になり関係が改善した、喫煙、飲酒などの悪習慣を断ち切り耕作など家事手伝いに勤むようになったなど、ワークショップの成果も受講者およびその家族から報告されています。さらに青年会と中学校の教員が協力し、教会、モスク、学校を解放して個人・グループ双方を対象としたカウンセリングを実施し、HIV感染から身を守ることの大切さを伝えました。この結果、90人の学生が抗体検査（HIV感染について調べるもの）を受け陰性であることが判明し、今後も予防を怠らない決意を新たにしました。

また学校を母体とした青少年に向けたHIV感染予防対策として、青少年の行動を変えるために有効とされる演劇、音楽・スポーツイベントを実施しました。HIV／エイズを題材にした演劇祭には、地域の中学校12校から約2,000人の青少年が参加し、地域の人々にもよい啓発となりました。



職業訓練を受ける子どもたち

支援を受けた人々のストーリー

出産後2週間で亡くなった母親は、HIVに感染していました。残された子どもは、支援を通して成長に必要な栄養補助を受けました。栄養価の高い補助食のおかげで、当初3.7キログラムだった体重も順調に増え、2か月後には5.2キログラムになり、半年後には8.2キログラムになりました。現在では叔母のもとですくすくと成長しています。見違えるように健康になり、元氣いっぱい毎日栄養補助食なしには考えられません。

後も活動を担っていくことができるよう指導者育成を行いました。3年目に入り、少しずつですが事業成果が住民の目に見える形で現れ始めています。この歩みを止めることなく、地域住民が主体となって活動を継続していくことができるよう、今後はキトゥグム地域開発プログラムを通して見守っていきます。皆様の尊いご支援、ありがとうございました。

【事業内容】

インドネシアでは、麻薬使用による注射針からのHIV／エイズ感染が急増しており、特に若者への感染拡大が懸念されています。この原因によるHIV／エイズ感染は、全体の実に53%を占めています。本事業では、東ジャカルタ市における若者を対象とし、377のピア・エディケーター（同世代で活動できるHIV／エイズ教育・啓発者）グループから中学生約5,100人を中心にHIV／エイズ啓発メッセージを伝えました。

支援活動は、HIV／エイズだけでなく、麻薬を取り巻く問題、青

少年の非行問題に直接的に介入する対策として、学生、学校、地域が協力して実施されました。特に、訓練を受けたピア・エディケーターは、啓発活動の情報伝達者としてだけでなく、学校において態度、行動のモデル、リーダーとしても注目され、評価を受けています。今後は、現地で実施されている地域開発プログラムを通して、活動が受け継がれていく予定です。

チャンディは、小学4年生の時からワールド・ビジョンのチャイルドスポンサーシップによる支援を受けていましたが、2年前からピア・エディケーターとしての訓練も受けました。彼女は、ワールド・ビジョンが開催したイベントでピア・エディケーターの代表として発表を行いました。

チャンディは、「私は、ワールド・ビジョンから、人の前でどのように語るべきかの訓練を受け、HIV／エイズ、麻薬、家族計画などの知識を伝達す

るための術を学びました。学校で、また地域で、ただ伝える人としてではなく、相談にのりながら、タバコ・麻薬の危険性を友人、知人に伝えています」と語りました。現在、彼女は司会者として集会をリードする役目に抜擢されることがよくあります。彼女の夢は、ラジオ・キャスターになることですが、ワールド・ビジョンで受けたHIV／エイズの啓発メッセージを伝えながら、一步一步自分の夢の実現に向かっていくと感じています。
